

かを知りたくて、古本屋を巡っていた学生時代に出会った二冊。現在は『限界芸術論』（ちくま学芸文庫、一九九九）にまとめて収録されている。大佛次郎が書いた『鞍馬天狗』、『赤穂土』、『由比正雪』などの時代小説に、昭和初期の日本に対する風刺と批判を読み取っていく鶴見の議論は、作家が小説に施した仕掛けを解明して良しとする閑じた文学研究とは異なり、文学と文学研究の社会的意義を浮き彫りにしており、私にとって研究の出発点となつた。

②『ブレイク——革命の時代の予言者』

J・ブロノフスキイ／高儀進訳（紀伊國屋書店、一九七六）

複雑怪奇なテクスト群を生み出してしまつたために、狂氣というレッテルを貼られることの多かったイギリス・ロマン派の詩人ウイリアム・ブレイクを、ブロノフスキイは十八世紀英國社会という文脈の中で読み直し、ブレイクが検閲をかいくぐるために韻律に韻律を重ねながら、時の権力を批判し、言論と思想の自由を訴えたことを明らかにした。ポーランド出身のブロノフスキ

ーが、第二次世界大戦中にブレイクを読み、ファシズムに対する解毒剤をブレイクに見出したという事実は、文学研究のあるべき姿の一つを示す。

③『分裂病と人類』中井久夫（一九八二）

二〇一三年に新版が出た。中井の著作は学問領域の壁を超えた全人的な考察をしており、教えられるところが多い。

○一五)

④『柳宗悦とウイリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想』（東京大学出版会、二

キーバーが、第二次世界大戦中にブレイクを読み、ファシズムに対する解毒剤をブレイクに見出したという事実は、文学研究のあるべき姿の一つを示す。

吉、家康についての逸話は誰でもいくつか見ついているでしょうが、ブランドで育てば、同様に歴代ブルゴーニュ公の逸話を知っているのだろう、等、そういう違いにも僕に気づかせてくれました。これは二〇〇一年に中公クラシックスとしても出版されていますが、装丁は断然中公文庫版が良いので、手に入るならそちらをお勧めします。

②『一般相対性理論』P・A・M・ディラック著／江沢洋訳（ちくま学芸文庫、二〇〇五年）

大学初年度で物理を学ぶ際には、歴史的発展に沿つて学ぶか、現行の理解に基づいて天下り的に学ぶか、大きく二通りに分かれますが、これは後者の代表例でしょう。

非常に簡潔に薄く、最低限必要なことを過不足なくまとめていて、教科書のあり方の一つの極致です。

③『甲骨文字字釋綜覽』松丸道雄・高嶋謙

一編（一九九五）

これは漢字の最も古い形である甲骨文字

①『中世の秋（上・下）』J・ホイジンガ著

立川裕二（理学系研究科・理学）

たしかわゆうじ
高校のときになぜこの本を手に取つたのか覚えていませんが、それ以来の愛読書で

藤原書店

ヨーロッパは中世に誕生したのか?

J・ル=ゴフ 中世史の最高権威がダイナミックに描くヨーロッパ成史の決定版。英仏独西伊5ヶ国共同出版。菅沼潤訳 4800円

対欧米外交の追憶

1962-1997 (著)

有馬龍夫 日本の主要な外交現場に携わった、知性派外交官のオーラルヒストリー。竹中治堅編 各4200円

見えないものを見る力

「潜在自然共生」の思想と実践

宮脇昭 “いのちの森づくり”に生涯を賭ける、植物生態学者。 2600円
人類最後の日 少年少女へ。 2200円

「古代学」とは何か

展望と課題

上田正昭 文字史料を批判的にも考察しつつ、遺跡や遺物、神話や民間伝承なども総合的に考察。 3300円

詩魂

高銀・石牟礼道子 韓国と日本を代表する知の両巨人が、文学、人間、そして人類最後の聖地・海をめぐつて、魂を交歓させ語り尽くす。 1600円



年間購読料2000円(送料込) ◎見本誌・ブックガイド星 *表示価格税抜

〒162-0041 東京都新宿区早稲田1-5-23
振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301
ホームページ <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/>

の辞書で、各文字に関する考察を載せた論文を一九八八年のものまで全て枚挙したものです。僕の専門とは全く異なりますが、学問とはこういう地道な作業が基礎であるということを伝えてくれる、重い本です。出版までの九年間の苦闘を語った「あとがき」はどの分野を志す人が読んでも感動するでしょう。

and Readings in Physical Sciences の第一六巻(1997), Springer から Lecture Notes in Physics の第八九〇巻として出版されました。無料でネットで公式に手に入るものを出版社として売り上げが見込めるものか、大いに謎です。

月脚達彦

(学部教授／朝鮮近代史)

① 『客分と国民のあいだ』—近代民衆の政治意識

牧原憲夫 (吉川弘文館、一九九八)

これはいろいろな大学での集中講義の講義録をまとめたもので、はじめ <http://arxiv.org/abs/1312.2684> で無料で公開していたのですが、一社が出版したいというの、Hindustan Book Agency から Texts

た。しかし、本書によれば、「民衆」には「客分」なるがゆえの「政治意識」があり、それをもとに近代国家に「異議申し立て」をした。ところが、その「客分意識」は、十年後の日清戦争の時期には「国家と憂患を共にする」「国民意識」へと変容する。近代国民国家と「民衆」の格闘を描いた本書は、近代朝鮮のナショナリズムを専門とする筆者にとっても刺激的であった。

② 『世界のなかの日清韓関係史—交隣と

属国、自主と独立』岡本隆司 (講談社選書メ

チエ、二〇〇八)

日本と朝鮮は、「近代」という時代をかなり異なる位置で迎えた。その位置の相違として重要なのが、「中国」からの距離で